

市古尚三著

明代貨幣史考

鳳書房

著者略歴 (いちこ・しょうぞう)

1917年 愛知県豊田市に生まれる

1941年 拓殖大学商学部卒業

現在 拓殖大学教授 経済学博士

現住所 渋谷区上原3-33-15 (〒151)

主な著書・論文 『中国食貨志考——宋・元・明の貨幣史を中心として』(東華書院)「中華人民共和国の金融制度」(大蔵財務協会『世界各国の金融制度』第7巻 共著)「北宋仁宗朝の貨幣史上の意義」(『拓殖大学論集』第7・8合併号)「元朝の交鈔専用制度について」(『拓殖大学論集』第5号)「清朝貨幣史考」(『拓殖大学論集』第87・96・100号)

明 代 貨 幣 史 考

1977年7月25日 発行◎

定価 6500円

著 者 市 古 尚 三

発行者 関 広 志

発行所 鳳 書 房

東京都新宿区下宮比町2 西欧会館ビル

電話東京(03)268-4713 振替東京142227

まえがき

本書は、明代において中国の貨幣形態がどのように変わっていったかを明らかにしようとしたものである。いうまでもなく、貨幣の歴史もまた、その時代の変革に伴って変わって行く。したがって、明代の貨幣史も明代の政治、経済史との関連において観察することが、その特色をより一層明確に把握することになると考える。その視点に立つて明代二七〇余年の貨幣の推移を考察したのが本論文の内容である。

本書は昭和二六年から同三九年の間に筆者が、『拓殖大学論集』で発表した論文を骨子に、部分的に整理検討を加えて『明代貨幣史考』として纏めたものである。

中国では元代に世界にさがけて紙幣専用制度という高度の驚異的な幣制を採用したが、明代に入ると新たに秤量貨幣としての銀が使用されるようになり、しかも民間から自然発生的に流通界に出現し、やがては中国の流通界を支配する銀本位制の淵源をなすに至ったのである。

もともと中国貨幣史の研究は、日本では比較的未開拓の分野に属するのであるが、とりわけ元代、明代に至っては殆んど手がつけられていなかったというのが終戦後の昭和二〇年代当時の現状であった。このことは筆者に明代貨幣史の研究に入る大きな興味と動機を興えてくれた。

今、本書の内容をふり返ってみると、例えば銀を明代に秤量貨幣として盛んに通用した事実については、文献の上でも明白にして疑う余地もない。ところが当時どのような機関で、どのようにして鑄造され、どのような形式と過程を経て流通界に送り出されていたかなど、それらが貨幣史考察の上できわめて重要な課題でありながら、文献の上

では実証できない未解決の部分が残ってしまった。このような不明確な部分については、今後の探究を俟って補足して行きたいと考えている。

現在、『清代貨幣史考』の研究に入っていて、すでに成果の一部を大学論集を通じて発表してきた。ひきつづきの研究に専念し、一日も早くその完成を期したいものと念願している。

なお、本書出版にあたっては、拓殖大学大学院、学部ゼミ卒業生および多数の校友各位が、わざわざ刊行委員会を作ってこの計画の推進にあたってくださった。そのうえ貴重な時間をさいて索引作りや数次の校正など、並々ならぬご協力をいただいた。ここに心からの感謝を申上げたい。また、本書刊行にあたって献身的なご支援をくださった鳳書房社主関 広志氏にも併わせて謝意を表する次第である。同氏のご協力なくしては、本書の発行は実現しなかったと言っても過言ではないからである。

昭和五二年七月一〇日

著 者

明代貨幣史考
目次

明代貨幣史考 目次

序	3
---	---

第一章 明朝貨幣史概説	5
-------------	---

第二章 明初における銅錢による貨幣制度の樹立	18
------------------------	----

第一節 元末明初の反乱と朱元璋の中国統一	18
----------------------	----

第二節 元末明初の貨幣政策	23
---------------	----

I 元順帝至正二十一年より明太祖洪武八年に至る間の銅錢による貨幣政策	23
------------------------------------	----

II 銅錢による貨幣政策とこれを援けた租税物納制との関連性	27
-------------------------------	----

第三章 明太祖洪武八年三月における宝鈔制度の採用とその理由	32
-------------------------------	----

第一節 明朝の宝鈔制度の採用	32
----------------	----

第二節 明朝の宝鈔制度採用の必然性	35
-------------------	----

I 貨幣経済の発達	38
-----------	----

II 交鈔制度の営利性	39
-------------	----

III 中国錢の海外流出と銅錢の減少	42
--------------------	----

第三節	中国錢の日本への流出……………	44
I	南宋時代における中国錢の日本商人による搬出……………	44
II	元代における中国錢の日本への流入および足利時代の日明貿易による中国永楽錢の流入と正貨としての日本での使用……………	48
第四節	発掘錢の調査報告で見る中国錢の日本への流入……………	55
第四章	明朝の宝鈔制度の経過と物価調整策……………	65
第一節	明朝の宝鈔制度の経過……………	65
第二節	通貨としての銀使用の禁止より廉価物資の銀両表示に至る間の経緯……………	77
第三節	明朝の物価調整策……………	83
I	明代における物価調整策としての田租折納鈔と宝鈔制度との関係……………	95
一	田租折納鈔と宝鈔制度(95)……………	
二	田租折納品種の推移と折納鈔(107)……………	
II	明代における物価調整策としての食塩専売制および茶業専売制と宝鈔制度との関係……………	128
一	食塩専売制と宝鈔制度との関係(128)……………	
二	茶業専売制と宝鈔制度との関係(143)……………	
III	明代における物価調整策としての商税、鈔関税、その他諸税の折納および贖刑折納鈔と宝鈔制度との関係……………	155

- 一 商税、鈔関税、その他の折納鈔と宝鈔制度との関係 (155)
- 二 贖刑折納鈔と宝鈔制度 (171)

第五章 明代における銀兩經濟への変遷

第一節 明代における銀兩使用の發達

第二節 日明勘合貿易と日本の文献上に現われた中国の貨幣銀兩化

第六章 明代に銀兩時代へ推移した理由とその動機

第一節 中国古代からの伝統的貨幣思想と銀兩化への抑制

第二節 銀兩時代への推移の諸因

I 中国における銀産と銀の蓄積

II 明代における國際貿易の狀態と銀の流入

一 明代における國際貿易 (242)

二 宋元時代の銀の中国への流入と明代の成祖永楽—宣宗宣德年間における中使鄭和等による諸蕃國遠征と進貢貿易による銀の中国流入 (248)

三 憲宗成化、孝宗弘治以降における世界産銀額の増加と銀の中国への流入 (254)

四 慶長六年以降、寛文・宝永の頃の日本銀の海外への流出 (262)

第三節 明代における貨幣銀兩化の動機

I 永楽—正統年間の米作の全国的豊穰と官吏俸餉の關係ならびに貨幣銀兩化への影響

II 辺境の自給自足態勢の確立と現銀送達による経営機構の樹立

285

273

272

242

231

231

227

226

210

196

196

第七章 明代における銀価値の変動 291

第一節 米価、絹価、金・銀の比価および銀・銭の比価から見た銀価の変動 291

I 米価より見た銀価の変動 292

II 絹価より見た銀価の変動 305

III 金・銀の比価から見た銀価の変動 306

IV 銀と銭との比価において見た銀価の変動状態 307

第二節 明代における銀価値の変動状態の概観 312

第八章 明代における幣制変革の要因をなした財政の膨脹と明朝の崩壊 316

第一節 内政、外政上の諸問題と財政への影響 316

I 内政上の諸問題と財政への影響 317

一 勲戚、百官の奉餉と財政への影響 (317)

二 宗藩歳供の問題と財政への影響 (329)

三 宮殿の焼失とこれが建設にともなう臨時支出との問題 (331)

II 外政上の諸問題と財政への影響 340

第二節 明代の財政の推移と明朝の崩壊 349

I 戸口数および田土面積の推移と財政 350

一 戸口の増減と丁役 (351)

二 官民田総面積の増減と田賦 (354)

II 明代における財政の推移

一 太祖洪武より世宗嘉靖末年に至る歳入・歳出の関係 (362)

二 一条鞭法の採用 (373)

三 文禄・慶長の役と明朝財政 (375)

四 礦税の問題 (376)

五 東林派と非東林派の訌争 (379)

六 清朝の興起と加派 (382)

七 明末の遼餉・勦餉・練餉の問題 (383)

結 語

統計・図表目次 (vi)

統計・図表目次		
第1表	宋時代における鑄銭額	8
第2表	明太祖洪武二十六年の鑄銭額	9
第3表	明代の鑄銭	13
第4表	元末の順帝元統―至正年間における反乱	19
第5表	元末―明初の歳額鑄銭量	26
第6表	わが国における発掘古銭	56
第7表	わが国における主要な発掘古銭	60
第8表	鈔価値の低落	75
第9表	明太祖―毅宗の間における鈔法の趨勢	81
第10表	洪武二十六年における地租徴収の夏税・秋糧の内訳	98
第11表	折納の理由	99
第12表	政府の必要な物品で、土民の利便に適応した土産による折納の例証	100
第13表	全国的豊作により政府の倉庫充実し、財政上会計に余裕が生じ、米麦以外の品種による折納の例証	100
第14表	米麦の収穫が乏しいか、または米麦の作付不適の地方で、本色の米麦の納糧が民間の損失不便をまねく場合に行な	
第15表	う折納の例証	101
第16表	交通不便な地域における税糧輸納のはなはだしい困難を救済するための折納の例証	101
第17表	天災地変、蝗蝻の被害等の災禍地域の他物代納と地税軽減、民力救済の意味をもつ折納の類例	102
第18表	租税未納を整理追徴するに際しての折納と税糧軽減、民力救済を含めた場合の類例	102
第19表(A)	明代の地租の苛酷さと金・元時代との比較	105
第20表(B)	太祖洪武年間の折納の趨勢	108
第21表(A)	太祖洪武年間の折納の趨勢	109
第21表(B)	成祖永楽年間の折納の趨勢	119
第22表(A)	成祖永楽年間の折納の趨勢	120
第22表(B)	仁宗洪熙―宣宗宣德年間の折納の趨勢	121
第23表	仁宗洪熙―宣宗宣德年間の折納の趨勢	122
第24表(1)	明代の塩産区	127
第24表(2)	明代塩引発行高の推移	129
第25表	明代塩引発行高の推移	130
	明太祖の主要塩産地区平定年月と塩官設定年月の關係	131

第26表	元代至元一三年―延祐五年間の茶課収入の推移	144	第42表	明代における贖刑の変遷	177
第27表	明代における茶主要産地	144	第43表	明太祖洪武三〇年における贖銅錢量	181
第28表	明洪武初年の陝西、四川における茶課および茶園の状態	145	別表①	贓罰諸物の折納額	183
第29表	明代の茶馬交換価格	146	別表②	宣宗宣德三年七月の罰鈔諸例	184
第30表	明代各茶馬司における交易馬数	147	別表③	贓罰の金銀諸物折鈔額	185
第31表	明代交易馬のため各茶馬司で必要とした茶額	147	第44表	宣宗宣德より孝宗弘治年に至る贖鈔額の推移	186
第32表	宣宗宣德四年正月、市鎮・店肆・門攤税の課税都市	160	第45表	世宗嘉靖七年一二月における贖法の状態	187
第33表	船料の推移	162	第46表	贖罪条例の分類	190
第34表	神宗万曆六年における商税総収入額	168	第47表	京城内の府州県における納贖諸例図	191
第35表	宣宗宣德四年―毅宗崇禎二年の間における鈔関数の推移	169	第48表	京城外の府州県における納贖諸例	193
第36表	熹宗天啓元年より毅宗崇禎二年に至る鈔関税増徴の状況	170	第49表	明代における錢・鈔・銀の通貨としての変遷	202
第37表	孝宗弘治、世宗嘉靖二三年、神宗万曆六年の各商税	170	第50表	鈔・錢・銀の交換比価の推移	207
第38表	京城九門税の歳入鈔の推移	171	第51表	明憲宗成化四年前後の日本朝貢船名とその規模	214
第39表	唐代における贖銅の斤量	173	記 録	世宗嘉靖二六年の定海並びに壘山における下行価銀帳の記録	220
第40表	明代五刑の内容	174	第52表	太祖洪武年より英宗正統年に至る福建・浙江の歳課銀の変遷	232
第41表	明律の規定に基づき収贖しえた者の種類	174	別表①	唐代憲宗―宣宗のころの歳課銀額	236

第53表	鄭和の出発および帰国年表	245	第68表	明代における金銀の比価	307
第54表	世界産銀額の地域別産出額の推移	255	第69表	明代における金銀比価の推移	308
第55表	アメリカ大陸発見後における世界の産銀額	256	第70表	銀と銭との価格の推移	309
第56表	アメリカ大陸発見後における世界の産金額	257	第71表	洪武二年九月における勲戚の俸禄	318
第57表	明代における文武官の俸餉の推移	278	第72表	成祖永樂二年勲戚の歳禄内訳	318
第58表	唐玄宗開元二四年の俸禄と同時代の米価との比較	280	第73表	太祖洪武四年・同一三年並びに同二五年における百官俸餉の状況	320
第59表	宋太祖—英宗間の俸禄と同時代の米価との比較	280	第74表	俸禄の同時代の米価との比較	321
第60表	明成祖永樂元年頃の俸禄と同時代の米価との比較	280	第75表	歴代文職官員数の比較	322
第61表	明太祖洪武年—英宗正統年間に至る鈔・銭・銀の価値の変遷	281	別表①	洪武二五年一二月頃の武官、軍兵の員数	323
第62表	明の歴代別銀表示平均米価表	294	別表②	北宋時代における総兵員数の推移	323
第63表	明代の一〇年一期として計算した銀表示平均米価表	296	第76表	明初における鑄銭額	324
第64表	明代の五〇年一期として計算した銀表示平均米価表	296	第77表	憲宗成化以降の複雑な官俸支給の内容	326
第65表	明代における米価の推移	297	第78表	明太祖二三王の封建	330
第66表	明代における絹価表	305	第79表	明太祖洪武九年の諸王・公主歳供額	331
第67表	明代における絹価の推移	306	第80表	太祖洪武二八年における諸王・公主等の改定禄米額	332
			別表①	山西・河南両省における産米額（嘉靖四一年）のうち宗禄の占める比率	332
			第81表	明代宮殿の被災	339
			第82表	明代における外政問題の経過	341
			別表①	賦役の内容	351

第83表	明代における戸口数の推移	352
第84表	明代における官民田総面積の推移比較	355
第85表	明代における官民田面積と田賦額の推移	359
第86表	明代における田賦額の推移	363
第87表	英宗正統年以降、折納銀制度採用後における歳入・歳出の関係	364
第88表	憲宗成化年より孝宗弘治年における支出増加の一例	367
第89表	世宗嘉靖三〇年前後における京衛・辺鎮の軍備費の状況	369
第90表	嘉靖四〇年における各边防備の軍餉銀歳出額	370
第91表	熹宗天啓元年より同五年の鈔関税の推移	373
第92表	明代万暦・崇禎年間における軍餉増徴の推移	376
第93表	宋・元・明を中心とした幣制の推移	393
第94表	中国上古以来の経済段階と貨幣形態の発展過程	396

明代貨幣史考

明代における錢、鈔通貨時代から銀兩時代への
推移について

